

「振り返りシート」への回答をつうじて、 学習者はどのような内的変容を想起しているのか

How Do Learner Recall One's Internal change through Answering by the "Reflection Sheet"

石井 雅章^{*1}
Masaaki ISHII^{*1}
^{*1} 神田外語大学

^{*1}Kanda University of International Studies
Email: masaaki@kanda.kuis.ac.jp

あらまし：報告者は2018年度より担当するすべての科目で、報告者が提案する「学びのプロセス」モデルに基づいた「振り返りシート」を導入し、各回の授業終了後に学生が授業の振り返りをおこなっている。本報告では、「振り返りシート」への回答データを元に、学習者が「振り返りシート」への回答をつうじてどのような想起をおこない、自身に生じた内的変容を記述しているのかについて分析する。
キーワード：振り返りシート、内的対話、メタ認知、リフレクション

1. はじめに

授業での学びの効果を高める手法の一つとして、リフレクション（振り返り）がある。学習者は「自分で構築している知識を外化し明確化するときに、より効果的に学ぶことができる」とされる⁽¹⁾。リフレクションをつうじて、授業時の学習によって構築された知識を外化し、それにより学習効果が高まることが期待できる。

リフレクションには様々な手法があるが、振り返りシートを用いたリフレクションは代表的なものといえる。しかし、授業時間内もしくは授業時間外での実施にかかわらず、振り返りシートへの記述行為が、学習者にとって有効なリフレクションの契機となっているかどうかは、授業の実践者としては常に気になる点である。

報告者は、学習者の「学びのプロセス」モデルを提示した上で、そのプロセスに適合した形式の「振り返りシート」を作成し、担当授業で活用している。

本報告では、上述の「振り返りシート」への回答内容を元に、学習者が「振り返りシート」をつうじてどのような想起をおこない、自身の学習行動による内的変容をしているのかについて検討する。

2. 「学びのプロセス」モデル

報告者が提示する「学びのプロセス」モデルでは、学習者は《他者》との相互作用をつうじて何らかの刺激を受容し、学習者がすでに有している「知識・経験の総体」（《知識》と記す）と相互作用することで、学習者に何らかの心的変容をもたらすプロセスを重視している（図1）⁽²⁾。

授業における学習をこのモデルに当てはめると、学習者は教員の講義やワーク、ディスカッション等の学習行為をつうじて何らかの刺激を受容し、自身がすでに有している《知識》との相互作用により、学習者の心的変容をもたらすプロセスと言える。

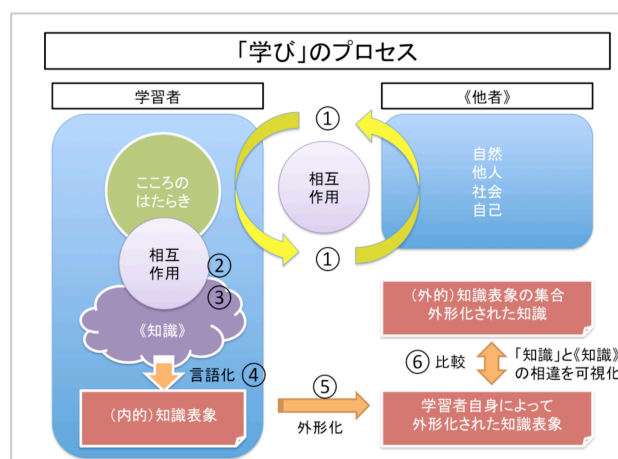


図1 「学びのプロセス」モデル

3. 「振り返りシート」のデザイン

適切にデザインされていない「振り返りシート」は、学習者に学習機会及び学習内容の何を想起させ、何を言語化させるのかを明示していない。その結果、授業の振り返りであれば、単なる感想が記述されていることもあれば、授業方法への疑問・要望等が記述される場合もある。

学習プロセスの一部としてリフレクションを実施するのであれば、「振り返りシート」のデザインが重要となる。

報告者は2で提示した「学びのプロセス」に基づき、学習者がリフレクションをつうじて、何を記述すべきなのかを明確にした「振り返りシート」を作成した。

「振り返りシート」の設問を図1に即して説明すると、①当該授業で「おこなったこと（事実）」を記述する、②+③当該授業をつうじた「心的変容」の有無を想起し、想起に要した時間と心的変容の種類

(驚き, 納得, 疑問, 知識欲, なしから複数回答)を選択する, ④自身に生じた「心的変容」をこころの中で言語化する(内的言語化), ⑤内的言語化した内容を文字として記述する(外的言語化), という構成になる。

本「振り返りシート」のポイントは, 授業内での学習行為(事実)と自身の内的変容を明確に分けて記述すること, 自身の内的変容を想起すること, 内的言語化すること, 外的言語化することを段階的に分けておこなうことである。

4. 「振り返りシート」の活用

報告者は, 2018年度から担当するすべての科目において毎回の授業で「振り返りシート」を活用したリフレクションを実施している。

リフレクションは授業終了後に, Google フォームをつうじて実施し, 基本的に授業翌日から2日以内に回答を促している。

本報告では, 担当するすべての科目における結果を示すことが出来ないため, 2019年度前期における「基礎演習」(日本語レポート・ライティング)科目における「振り返りシート」の記述内容をデータとして取り上げる。

表1 2019年度「基礎演習」における振り返りシートによる記述結果 (N=136)

項目	平均	標準偏差
①授業でおこなったことの記述文字数	20.78	17.17
②想起に要した時間(分)	6.39	12.31
②-A 驚きの出現回数(回)	0.32	0.47
②-B 納得の出現回数(回)	0.79	0.41
②-C 疑問の出現回数(回)	0.07	0.26
②-D 知識欲の出現回数(回)	0.24	0.43
②-E なしの出現回数(回)	0	0
④想起達成度(10段階)	6.70	2.18
⑤心的変容を外的言語化した記述文字数	52.58	58.98
⑤外的言語化の達成度(10段階)	6.70	2.18

8週目までの振り返り記述データ(N=136)における各回答項目の平均及び標準偏差をまとめたものが表1である。授業でおこなったこと(事実)に関する記述量が少ないこと, 記述文字数のばらつき(偏差)が大きいこと, 心的変容の種類としては「納得」が多く出現していることがわかる。

2019年度の授業においては, 「振り返りシート」のなかで, ④学習者自身による内的言語化における達成度合い(10段階による自己評価)と⑤外的言語化の達成度合い(同じく10段階による自己評価)についての質問項目を追加した。

なお, 2018年度授業における「振り返りシート」の活用と, 記述文字数及び内的変容の有無との関係については, 別に報告をしているため本報告では省略するが, 記述文字数といくつかの内的変容の有無については相関が見られたことを記しておく⁹⁾。

5. 心的変容の種類と振り返りの関係

授業での学習活動をつうじて生じた心的変容の種類により, 振り返りがどのように異なるのかについてまとめたものが表2である。

表2 2019年度「基礎演習」における心的変容の種類別の記述結果(平均)(N=136)

項目	驚き	納得	疑問	知識欲	全体
選択数	43	108	10	32	-
①事実記述文字数	22.95	22.73	25.10	20.03	20.78
②想起時間(分)	5.84	6.97	4.78	3.50	6.39
④想起達成度(10段階)	6.47	6.89	6.20	6.94	6.70
⑤外的言語化記述文字数	76.12	53.91	110.9	69.44	52.58
⑤外的言語化の達成度(10段階)	6.51	6.80	6.20	6.75	6.70

結果を見ると, 事実を記述した文字数に関しては大きな違いが無いものの, 外的言語化した記述文字数に関しては, 疑問や驚きという心的変容が起きたと想起した際に多くなっていることがわかった。また, 疑問の心的変容を想起した場合は, 想起時間をはじめ想起達成度についても他の変容と比較して異なる傾向を示していることがわかる。

6. おわりに

本報告では, 実際の記述内容に関する分析までおこなうことができなかった。今後は振り返りシートに記載された記述内容と想起の傾向についての分析をおこないたい。

参考文献

- (1) キース・R・ソーヤー: “イントロダクション: 新しい学びの科学”, “学習科学ハンドブック第2版”, 北大路書房, (2018)
- (2) 石井雅章, 陣内雄次, 勝浦信幸, 長岡素彦: “PBL実践における学修成果の可視化手法に関する実践と考察”, 関係性の教育学 17(1) 15-27, (2018)
- (3) 石井雅章: “授業内学習行動の想起に重点をおいた「振り返りシート」の効果検証”, 第25回大学教育研究フォーラム予稿集, p.188, (2019)